**y compris の構文化**

**―1500年代から2000年代までの通時的分析を中心にー**

**國末 薫 (東京外国語大学大学院)**

本発表では、「〜を含めて」を意味する表現 y compris に着目し、この表現が統語的、機能的に拡張していく過程をコーパスの観察を通じて記述し、考察する。 Grevisse (2008, 2011) は、 y compris を独立分詞構文として位置付け、この表現が付加形容詞のような機能を果たし、 (1) のように、主節の名詞句や代名詞の範囲を規定する機能を持つことを指摘している。ただし、前置詞が後続する場合 (2) では、独立分詞構文としての特性が薄れており、副詞 (cf. Grevisse 1980) や接続詞に近い機能を果たす。後続する文の要素についても、現代の用法では、名詞句のみならず、副詞、形容詞、節など様々な要素を従えることができる。

1. Tout le monde était arrivé sur la plage, Y COMPRIS l’homme dont le bateau était là.

(DURAS, *Petits chevaux de Tarquinia*, cité dans Grevisse 2011)

1. Je crains le regard des hypnotiseurs, y compris sur les photographies .

(Frantext, LEVÉ Édouard, *Autoportrait*)

y compris がどのような過程を経てこれらの用法を獲得するに至ったかについては、これまで十分に検討されていない。したがって、本研究では、書き言葉のコーパスデータを通時的に分析することで、 y compris の用法拡大のプロセスを明らかにする。

分析の対象は、書き言葉コーパス Frantext のデータである。コーパスの検索の結果、1500年代から2000年代までのデータにおいて y compris （女性単数、女性複数、異なる綴り字を含む）は使用され、全体で2553例になった。これらのデータにつき、共起語、統語環境、機能面から観察し、年代毎の特徴を明らかにする。分析と考察の結果、 y compris には、統語面及び機能面での拡張がみられ、これは、 Traugott & Trousdale (2013) で提唱された「構文化」の概念を援用することで説明できる。